

セッション I

異界との交流

【総括】

田中 琢 三*

人間が生きる日常世界の外側にある世界、つまり異界との交流譚は、古今東西さまざまな地域の説話や文学において語られてきた。例えば、人間が動物や妖精など異界の存在と結婚する「異類婚姻譚」は典型的な異界との交流譚である。セッション I の目的は、ヨーロッパとアジアにおける異界との交流譚を取り上げ、それらの特性を比較の観点から検討することにあつた。以下では、講演や研究発表の概要、そしてパネルディスカッションにおける議論の内容を報告し、総括したい。

本セッションは、猪崎弥生副学長による挨拶、田中による趣旨説明の後、まず、我が国の比較神話学の第一人者である篠田知和基氏による基調講演「メリュジーヌ伝承から異類婚説話へ」が行われた。篠田氏は、フランスの代表的な異類婚姻譚である妖精メリュジーヌの物語を中心に、それを鶴女房や蛇女房などの日本の異類婚姻譚と比較しながら、このタイプの説話の特徴を分析した。そして結論として、異類婚説話の意味を考えるうえで、異類や人間の「罪」と「悪」の問題が重要であることを指摘した。該博な知識に裏打ちされた密度の濃い内容で、聴衆の知的好奇心をくすぐる刺激的な講演であつた。

これに続いて、4本の研究発表が行われた。まず、兼岡理恵氏の発表「異界との交通—海幸山幸神話を中心に—」が行われた。兼岡氏は、おもに海幸彦と山幸彦の神話を取り上げ、「海」という異界との往来における移動方法や、その異界との

境界がどのように表現されているのかを、『記紀』の原文を引用しながら実証的に分析し、上代文学における異界としての「海」のあり方を空間的な観点から明らかにした。特に「海」との境界を示す「サカ」や「ハシ」という言葉に関する鋭い指摘が印象的であつた。

次に、高永爛氏による発表「韓国文学における異界との交流譚—ドゥドゥリを中心に—」が行われた。高氏は韓国の文献文学に登場する異界の存在、特に人間と神の中間的存在とされる「ドゥドゥリ」を取り上げ、その起源や特性を政治的、社会的状況と関連づけながら解き明かし、さらに朝鮮王朝期の仏教説話の移入および儒学的思想の影響による「ドゥドゥリ」の性格の変容を明快に指摘した。日本では知られていない韓国文学における異界を紹介したという意味でも価値のある発表であつた。

休憩の後、加藤敦子氏による発表「狐女房に見る異界」が行われた。加藤氏は狐と人間の異類婚姻譚であり、人形浄瑠璃や歌舞伎によって知られる「信田妻」の伝承を軸に、我が国の異類婚説話の特性について検討した。『狐草子』などの狐に関する説話では、狐の世界という異界の空間における時間と、人間界における時間の進み方が異なっていることを指摘し、そのうえで江戸時代に書かれた一連の「信田妻」の物語にみられる時間と空間のあり方を見事に分析した示唆に富む発表であつた。

最後に中丸禎子氏の発表「バレエを踊る人魚姫—「爪先立ち」があらわす異界—」が行われた。

*お茶の水女子大学助教

中丸氏によると、アンデルセンの童話『人魚姫』のなかで人魚姫が王子の前で踊るダンスは、同時代のロマンティック・バレエを連想させるといふ。ロマンティック・バレエは、爪先で立つ技術「ポワント」を導入することによって、空中を漂う妖精や霊を表現し、異界との交流を描くことが多かった。また中丸氏は、『人魚姫』のラストに登場する「空気の娘たち」は、ロマンティック・バレエの代表作『ラ・シルフィード』から着想されたと考えられ、海の底から人間界という人魚にとっての異界へ上昇しようとする人魚姫のイメージと重なりと指摘した。文化史的な観点を取り入れながら、従来の研究では指摘されていない『人魚姫』におけるバレエ・モチーフの存在を明らかにし、それを多角的に分析した独創的な発表であった。

その後、休憩を挟んで、田中の司会で5名の登壇者によるパネルディスカッションが行われた。前半は会場からの質問にパネラーが個別に答えるという形式、後半はパネラーが全員で議論するという形式をとった。前半の質疑応答のなかで、篠田氏によって異類婚姻譚に関してより詳しい説明がなされた。例えば、なぜ異類が人間界にやって来て人間と結婚するのかという問題のひとつの答えとして、異界で罪を犯したものが、異界を追放されたため、あるいは贖罪のために人間界を訪れるという背景があるという指摘がなされた。パネルディスカッションの後半では、まず『狐草子』に見られるような異界と人間界との時間の流れ方の違いが話題になった。高氏によると韓国にもそのような浦島太郎的な物語が存在するという。さらに、異界と人間界の「境界」について議論を行った。篠田氏によると、ヨーロッパで「境界」となるのは森あるいは川や海などの水であるが、兼岡氏と加藤氏によると、日本では野や山、あるいは「一条戻橋」の話に代表されるように橋が異界との接点となることであった。また、この問題に関しては、前半の質疑応答のなかで、会場から、

インドには狩りの途中で異界の存在と出会うという神話があり、狩りが「境界」になっているのではないかという指摘があり、篠田氏がそれを全面的に肯定するというやり取りもあった。

パネルディスカッションの最後に、司会の田中が、なぜ日本とフランスあるいは世界中に似通った異類婚姻譚があるのかという問いを發したところ、篠田氏から、人間が欲望に負けて結婚相手を裏切るという禁忌背反のテーマ自体に普遍性があるという要因に加えて、かつて飛行機や自動車がない時代に、行商人がヨーロッパからアジアまで歩いて商品を運んでいたように、同一起源の物語が、行商人らによって口から口へとリレーのように語り伝えられ、その結果フランスや日本、あるいは世界各地に伝播した可能性があるという非常に興味深い指摘がなされた。

このセッションの成果としては、まず、異界との交流譚を論じるための多様な視点や材料が提供されたということが挙げられる。そして、パネルディスカッションにおいて、登壇者の中で、あるいは登壇者と来場者の中で、文学のみならず民俗学、比較文化学に関わる分野横断的な議論が行われ、考察が深められたことが大きな収穫であった。また個人的な感想になるが、私自身としては、これまで知らなかった比較神話学の面白さに気づくことができたという意味で大変有益であった。

当日は、猛暑のなか50名を超える多くの来場者があり、盛況のうちに終えることができた。参加者へのアンケートでは「期待していた以上に充実していた」「勉強になった」など肯定的な意見がほとんどで、このセッションを企画した者として大変嬉しく思う次第である。この場をお借りしてスタッフ、関係者の皆様にご挨拶を申し上げます。

なお、本セッションは、JSPS 科研費25370374の助成を受けた研究「世界文学としてのアンデルセン『人魚姫』の超領域的研究と教養教育への応用モデル」（研究代表者：中丸禎子）の成果の一部である。